

<トビウオ期のトカラ堤防 GT フィッシングの技術2点>

- ① はトカラ列島口之島の赤瀬(沖磯だが大潮満潮時を除いて陸行可能)と赤灯台で、有名過ぎて、景色も映っていますし、名を伏せる事に意味は無いと思います。口之島は左手近くに沖堤があり、もし大型を掛けても回られたら取り込みは不可な為、長期堤防 GT 狙いに敬遠される傾向あり、又唯一堤防のキャパが小さい。餌釣りの場合に必須になる尻手ロープに関して: 大物釣りの場合の尻手ロープは支点に結ぶのではなく、シュリング(→ネットで調べる)を作ってカラビナ連結する必要があります。ロープ端を結ぶと、解除が片手で出来ず、このビデオにありますように誰か他人に解除してもらう必要が生じます。もっと正確に言えばカラビナ連結は竿側でやる必要があります。こうすれば、魚ヒット後は竿を片手で保持している訳で、ロープが邪魔であれば、カラビナは残りの片手だけで、手元で簡単に解除できます。トカラの堤防ではボルトの使用が禁止されているのみならず(役場から通達が出ている・・・しかし島によっては堤防が古く既にボルトだらけの所もある)、ドリルで穴をあける事もできないから、石鯛用竿受けも使えない。支点として略確実に使えるものがある。ハーケンだ。堤防はコンクリートの巨大なブロックを積み木細工のように組み立てて作っており、このブロックとブロックの接合部に狭い隙間(リス)があり、此処にハーケンを打てる場合が多い。ハーケンは帰りに抜けば良いし、傷も残さない。このハーケンにシュリングを掛け、此れにカラビナを掛け、尻手ロープの端に作ったループをカラビナに掛ける。又竿側は、別のシュリングを、リールフット固定部の竿に掛け、此れに尻手ロープの竿側に掛けたカラビナを掛けてもよいし、もうここではシュリングを使わなくて、尻手ロープ端に掛けたカラビナを直接リールフット固定部の竿に巻いてロープ本線にカラビナを掛けてもよい。又車を直接堤防先端まで付けられる場合は、ハーケンは打たなくても、ホイールのスポークにシュリングを掛け、此れに尻手ロープ端カラビナを掛ける事もできる。ハーケンとシュリング、カラビナの使いこなしは大物志向者にとって必須の技術であり、武器となる。そして竿受けだが、角材が転がっていればそれを、無ければ流木が堤防付け根の反対側辺りにいくらかでも転がっているのでそれを拾って来て、竿の前に枕として敷けば(私は五寸釘を2本打っていた)、石鯛用竿受けなどよりずっと安定した竿受けになるし、竿も傷つかない。支点と竿受けをしっかりとさせることにより、ドラッグをある程度締められるようになる。こうする事により、魚が食って走った瞬間に針を口にしっかりと掛ける事ができる。支点がしっかりしていないと、ドラッグを完全フリーにしなければならず、これだと、当たりが有って駄け寄ったら、魚はもう餌を吐き出してついていなかったというのは、皆さんもよく経験していることでしょう。これを低減できます。
- ② は遠景の島影をぼかす等して、どの島か特定できないよう編集しており、最後には念入りにも、視聴者にどの島か分かったとしても言わないでほしいという事です(大体推測はつきますが)。私がこの文章を読んでいる人に申し上げたい事は、この島が何処か特定する事に執着する必要は無いという事です。これはトビウオの入りが MAX になり、港の一番奥＝船着き場迄達し、そこで島人が照らす集魚灯にトビウオが集まり、GT 等を含めて、乱舞している状況を示しており(島人はこれをタモで掬い、一晩で売り上げ数万から十数万?)、トビウオの入りが MAX になれば、トカラ有人七島のどの島もこういう状況になるという事です。其れよりも、トカラに行ってみよう

と思われる方は、次の事をこのビデオから学習された方がいいと思います。此れだけ GT が食ってきていながら、フッキング率が異常に悪い、それは何故か。ルアーの大きさの割にフックが小さすぎます。GT は口が大きく、パクッと食った時点で、ルアーもフックも一旦は口の中にすっぽり入っていると考えられ、それが餌でないと分かった瞬間に、パッと口を開けて吐き出す訳です。その開いている口に内側から、フックが引っ掛からないといけない訳ですから、ルアーの直径にも満たない小さなフックでは話になりません(その事をこの方は気づいていません)。此れではどう考えてもデカすぎるだろうという程の馬鹿デカフックを、針先の鋭利さに注意を払いながら、テールに一本スプリットリングで直結すればフッキングする筈です。